

# 脱原発には自然エネルギー一辺倒では失敗する

せいがん  
鈴木齊観

福島第一原発事故の余波により、浜岡原発は運転を停止させられた。不幸中の幸だが、停止中であっても安全というわけではないというのは今回の事故で初めて知ったところである。これがその廃炉への出発点、そして日本・世界中での脱原発の出発点となって初めて、「幸」と言える。

この間、脱原発へ向けて、自然エネルギー開発への動きが活発化してきた。それは嬉しいが、耕作放棄地などを使ったメガソーラー（大規模太陽光発電所）が中心であるのは不安を感じる。一つは食料の国内自給の為に再開されなければいけない耕作放棄地が転用されてしまうこと。もう一つは自然エネルギーの中でも特に効率が悪い太陽光発電にばかりに目が向けられている様に見えること。規模拡大や太陽光パネルの大量生産でコストが下がることは期待できるが、それが十分なものになり得るのか。この集中的な試みの失敗によって、原発に息を吹き返す機会を与えてしまうのではないかと心配する。

現在の発電システムの問題は原発中心であることだけでなく、原発や大規模発電所による集中型の発電・送電システムであることである。送電ロスの問題や大規模発電所が与える環境負荷の問題を減らし、また自然エネルギーによる発電を増やす為にも、分散型の発電・送電システムに変える必要がある。その地域で発電した電力はその地域で使い、余剰は送電網を通して他地域に回すわけである。大規模であると問題が生じる水力発電所や風力発電所なども小規模なものを、立地条件に合わせて選んで設けることができる。

発電の中核としては、発電の廃熱も利用す

る為に効率が良いコージェネレーション(天然ガス・石油・石炭・バイオマス等)を地域毎に設ける。そこからその地域へ熱エネルギーと電力が供給され、余剰電力は送電網から他地域に回すことができる。また電力の供給・需要を管理することがコンピュータでできる技術があるから、自然エネルギーの不安定分をコージェネレーションで調整するわけである。

現在の発電・送電システムでは、原発が出力調整できない為に余る深夜電力の料金を安くして需要を増やしていた。これは省エネに逆行していたわけだが、新しいシステムでは、需要に供給を合わせることができ、無駄な発電を抑えることができる。

脱原発から一気に自然エネルギーに向かう動きの根底には、CO<sub>2</sub>地球温暖化説があり、石油埋蔵量が少なくなっているという話がある。しかしCO<sub>2</sub>地球温暖化説は科学的ではなく、政治的なものであるように思える。原発安全神話を多くの科学者が支持し、異論を唱える科学者が不当な扱いを受けていた様に、「科学」は名ばかりではないか。石油埋蔵量の数値は以前もそうであったように、固定的ではなく、増大が予想されるものである。また天然ガスもある。

エネルギーの大量消費を改め、自然と共生した社会に向かうと同時に、化石燃料を効率良く使うシステムを取り入れることが現状として確実な方法ではないか。

報道によると、超党派での地下式原発推進の動きがあり、それが脱原発を進めようする菅首相降ろしにつながっているという。脱原発を確固たるものとし、将来の復活を許さない為にも、自然エネルギー一辺倒の動きは修正されなければいけないのではないか。

(2011年6月)